見習い魔法使いと退屈びより

からすま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見習い魔法使いと退屈びより

【Ｎコード】
Ｎ７４１８Ｉ

【作者名】
からすま

【あらすじ】
とある世界に、見習い魔法使いと、普通の男子高校生の＜俺＞が、一室に暮らしていた。人間嫌いな見習いと＜俺＞の仲は最悪最低、二人の共通点といえば、別の世界からきた事だけ。読書に夢中な見習いに不満げな＜俺＞。ある日、＜俺＞が見習いに人間嫌いな理由を聞く。そこで、見習いから悲しき過去が語られて・・・。

（前書き）

これは、大学の学祭で出しました。連載を書いてたのですが、今回の学祭は、短編になりなましたので、連載はまたの機会と言うことで。連載は、現実世界の話なので、今回はファンタジーをテーマに書きましたが・・。あいかわらず、ぐたぐた、表現不足。でも、少しでも、楽しんでいたたければ幸いです。。

「・・・なんなんだ？お前いったい、さっきから無視しやがって。」
ここは、とある世界の魔術学校。
魔法なんて、漫画やゲームといった実際にはあり得ない空想だと思っていた。
しかし、この世界はそんなばかみたいな話が、普通に起こる。
俺の世界では、ミサイルや核が主流だったが、この世界はそんなものは、頼りにならないと思っている。
この世界では、魔法がすべてだ。
そして、今、俺の目の前で静かに読書をしている女も魔法を使う。
正確には、まだ魔法を勉強中の見習いであるが。
俺は、この女に対し、さっきから話しかけているのだが、眼中にないのか、返答なし。
何度か、顔の前に手をぶんぶん降るが、反応はなく完全に本の世界に入ってしまっている。
「・・・・・。」
本を読む姿は、真剣そのもの。
そんな、近くで本を見ていて、よく目が疲れないと思う。
俺だったらすぐ本の内容に飽きて、爆睡してしまうだろうに。
「おーい。いいかげん、反応してくれ。退屈なんだが・・・。」
ちなみに彼女は二時間近く、本を読んでいる。
俺は、何回も話しかけるが無駄のようである。
もうすぐ昼の十二時なんだが、このままで行くと忘れられてしまいそうだ。
実際に忘れられたのは一度や二度ではない。
たびたびあり、どれほど午後を空腹で過ごしたことか。
しかたない。
自力でなんとかするか。

俺は、すっと立ち上がる。
すると、俺の様子に気がついたのか、彼女はぴくっと、反応していたが。
しかし、俺はすでに体を背に向けていたので彼女の様子に気がつかず、そのまま行こうとした。
「・・・・・★○◆」
ぼそっと、彼女は小さな声で何かをつぶやいた。
その時だった。
どかーん
「・・・・っ。」
突然、俺の頭上にタライがなんの前振りもなく降ってきた。
そのまま頭に命中、そのまま頭を押さえる。
今、すごい音がしたぞ。
「・・・・どこ行くの？」
俺の背中越しに聞こえてきた声は、不機嫌そのもの。
女にしてはめずらしくすこし低めの声。
その声は、部屋の空気を一瞬で凍らせる程の威力だった。
「あー。食料を貰いにだよ。お前、何回も俺が話しかけても無視してたろ？だから、このまま行けば、確実に昼飯、忘れられると思ってな。」
後ろを振り返らず、答えた。
たぶん、振り返ったらおぞましいオーラが彼女からただよっているに違いないから。
それだけは、勘弁してもらいたい。
「ふーん。この私の許可なく勝手に行こうなんて、人間の分際で生意気ね」
「げっ。」
驚いたいつのまにか彼女は、俺の目の前にいる。
読みかけの本は、机の上に不造作に置いてあった。
これも魔法の力だろうか。

だったら、勘弁してくれ。
こんなどす黒いオーラしている奴の顔なんかみたくなかったのに。
彼女は、眉間にしわを寄せ、怪訝そうに心底嫌そうにこちらを見ていた。
正確には彼女の方が、身長がでかいので見下ろされていた。
男として、女に見下ろされているにはどうかと思うのだが・・。
「・・・この学園で、あなたの監視兼教育係は、私なの。だから、かってな行動は困る。」
彼女はぼそっと、言葉を紡ぐ。
いつもは、読書に夢中じゃねえか。
俺の事、眼中にないくせによ。
よく言うぜ。
俺の心の声が聞こえたのか彼女は、
「なに？その顔・・文句がありそうね。本来なら、人間なんかに世話なんてしたくないけど、しかたなく命令でしているの。それだけでもありがたいと思いなさい。」
と、えらそうに言った。
さっきから話している通り、俺はこいつにお世話になっている身だ。
文句は言えない立場である。
ここは、言い返したいが我慢して、右手を握りしめた。
しかたなくか・・・・。
俺だって、好きでお前の世話になっている訳ではではない。
それは、こちらのセリフでもある。
こいつは、魔法使いだが、俺は、ごく普通の高校生だったはずだ。
それが、どうして魔法使いの世界の。
よりによって人間嫌いな魔法使いにお世話にならなければならなくなったのか・・。
必然なのか運命なのか。
俺は、無理やりこいつらの仲間によって、この世界に連れて来ら

れた。
どうやら、こいつらの仲間は俺の幼い事からの宝物（虹の宝石というらしい。）に目をつけたようである。
その宝石は、魔法の効力を上げる力を持つらしい。
はた迷惑な事にこの世界に来て、さまよっていたら、この学園の者に連れていかれ、こいつと共に暮らすことになった。
こいつと暮らして二カ月が過ぎた。
悪いが俺もこいつとは仲良くなれそうな気がしなかった。
お互いが嫌い合っている。
それが、俺達の関係だ。
そんな俺達がよく一つ屋根の下で暮らしていると思う。
部屋には、きまずい空気が流れた。
俺は、そんな空気を打ち消すかのように思い切って前々から聞きたかった事を言う事にした。
「・・・そんなに魔法使いと人間っていうのは違うのか？前々から人間なんかと言うが、なんでどこまで人間を毛嫌いしてるんだ？」
こいつの場合、嫌いというか拒絶のような気がした。
思えば、こいつだって、魔法を始める前、つまりこの学園に入学するまでは、人間だったはずなのだ。
それが一体どうしたらこんなことに・・。
「・・・・・・・。知りたい？」
めずらしく、いつもの嫌そうな声ではなかった。
俺は、頷いた。
「・・・分かった。その変わり、約束して。絶対誰かに言わないと。」

2、　見習いの過去
（＊ここで視点が見習い視点に移ります。ちょこっと、過激な描写に注意。嫌な方は、とばしてくださいな。）

私は、今、とあるビルの屋上にいた。
今の季節、肌寒く、風が髪を揺らす。
屋上からは、ネオンの町並み。
車の音、人の声、ざわめき・・今の私にとって、それさえも憂鬱になる。
やっと、誰にも邪魔されない。
ここまで来れば大丈夫。
もう、こんな世界とは、おさらばだ。
今度は、人間とは縁がない世界に行きたい。
人間なんてうんざりだ。
いつも、私をバカにする。
いつも、私を妨げる。
いつも、私だけ仲間はずれ・・。
人間なんて嫌い。
人間でいる事がこんなにもクルシイ。
誰も私を助けてくれなかった。
だから、助けなんていらない。
今まで孤独を胸に一人で生きてきた。
もう、いいちゃんの私はおしまい。
やつらは、私を妨げといて、すっかり忘れているでしょうけど。
私が言い返せない事を知っていて。
絶対、ゆるさない。
本当は生きて復讐したかった。
でも、それができない。
私は、今、塀のそばに来ていた。
あと、もう少し・・。
塀の網をつかみ、足をかけ、上る準備をする。
言い訳なんてできるなら、してみなさいな。
たとえ、世界中から敵視されても、それは私がいなくなった世界だから、私は知らない。

私は、塀をよじ登る
これで・・・。
あとは、
私は、ネオン輝く街に向かって飛んだ。

＊＊＊＊＊＊
思えば、私は小さいころから、必ず誰かから疎外されていた。
苦しくて泣いていても誰も助けてくれない。
両親は、泣いて帰ってきた私を訳もなく叱る。
小学校、またいじめられた。
理由は、とろいから。
くだらない理由。
味方してくれた子がいないが、大半のクラスメートから疎外されていた。
クラスに一人は、とっつきにくい子がいるだろう。
それが、今の私。
誰かと遊んだ記憶なんてあったかな。
友人がいても、すぐお別れ。
いつも、ひとりでいた。
中学校、やっと変われていたと思っていた。
でも、違う。
ある日、仲良しなった子に陰で悪口を言われた。
その日から逆戻り。
部活でも、とろくて判断力が鈍い私。
チームワークを乱す。
毎日、言葉攻め。
反吐がでるくらい。
苦しくて先生に訴えた。
でも、より悪化。
ついには、学年中に嫌われた。

復讐してるんじゃないかとあることないこと噂されたがそうでもない。
私を見る周りの視線。
気持ち悪い。
人に見られるのがにがてなのに、周りはくすくす。
味方だった友人から裏切られた。
いじめたやつと手を組んだ。
あーどうしてるかな？
たまに連絡来るたびに反吐が出る。
あいつにわたしはうらぎられた。
あんなメールの謝り文で許すわけがない。
思い出したくない中学は終わり。
高校になっても、トラウマになった私は静かでおとなしい、とっつきにくい子。
そういう風に演じるのが楽になったから。
いつまでも、ピエロを演じる。
そして、私は、いつも、
行動が自分の意思に反した行動をしてしまう。
其れを訴えても分かってくれない。
直したくても直せない。
どんどん小さいころからの闇はふりつもる。
不思議な子。
緊張しているって言われる度にストレスがたまる。
好きでしてないだけど。
あーあ。
周りが理解なし。
訴えたって今までの経験からバカにされるのがおち。
所詮、偽善者・・・・か。
こういう風に私の人生はろくなことがなく、不運続き。
それを小さいころから繰り返し、もう、うんざり。

そういう人生から、おさらばだ。
あいつらに、復讐できないのは悲しい。
死んでしまえば、どうにもならない。
でも、
これからいくだろう地獄はいいとこかな？
今の災厄な、この世界よりかはましであって、ほしい。
もうすぐ、地上だ。
これで、やっと・・・。
＊＊＊＊＊＊
それから、数日後。
深夜。
一人の中学生ぐらいの女子生徒が路地を歩いていた。
おそらく、大きいスポーツバックを肩から背負っていたので、部活帰りだと思われる。
遅くなってしまった事を気にして、さっきから、左手でつけている時計をちらちら気にしていた。
彼女以外、路地は誰も歩いておらず、それがかえって不気味さを漂わせる。
先日、同級生が死んだ。
死んだ彼女の名前は、結崎安寿。
死体は、大通りの真ん中で倒れていたのを発見された。
おそらく、あの大きなビルから飛び降りたのだろう。
結崎さんが落ちてきたとき、あまりの衝撃音と人が落ちてきた事で、周りにいた通行人はざわめいた。
結崎さんを発見した者による死体は、目が見開いていて、体の周りには、大量の赤い血、そして・・・内臓が飛び出し、かなりえげつない状態だったと言う。なぜ、死んだのか分からない。
おとなしい、クラスで目立たない子だった。
誰にでも、優しくて・・。
ひただ、おとなしく、いつもおどおどしていたから、いじめっ子

の標的にされ、学校でも彼女に対する思わしくない噂が流れたりした。
私は、友人から、その噂を聞いたとき、ただ笑って聞いていた。
だが・・。
それと、同時に涙を浮かべた結崎さんが走って行くのを見た。
たぶん、聞かれていたのだと思う。
私は、今でもあの時の彼女の姿が離れない。
もしかしたら、恨まれているかもしれない。
彼女が死んで中学は、大混乱になった。
校長と結崎さんの担任は辞め、彼女の死に対する噂が流れた。
だが・・・。
もしかしたら、私のせいかもしれない。
私は罪悪感でいっぱいだった。
考えてもしかたない。
今は、彼女の分までいきるし・・か。

じじじっ。
街の照明が建てつけ悪くなったのか、ちかちかしていた。
緊張と恐怖で、つっと、額に汗が流れた。
「びっびっくりした。」
私は、後ずさりしたあと、早足で歩く事にした。
今日は、早く家に帰ろう。
考えちゃだめだ。
考えていたから・・。
必死にある考えをしようとする思考を捨てようとした。
さっきのは、たまたま照明の建てつけが悪かっただけ。
だが、次の瞬間、その思いは浮上することになる。
がしっ。
「ひっ・・・・・・。」
突然、何かに腕を掴まれた。

それも、すごい力で・・・。
私は、恐怖で涙を浮かばした目を閉じた。
目を開けてはいけない。
開けたら、きっと・・・。
すると、
「あっ・・・・。」
もう一つの腕が掴まれた時、思わず目を開けてしまった。
「・・・・・・えっ？」
私は、見てしまった。
私の腕には路地に植えてある植物の蔓が巻きついていた。
すごい力が巻きていているので、その部分が真っ赤に腫れていた。
そして・・・・。
私の目の前にちょこんと座って、様子を見ている・・・。
「・・・・・結崎さん？」
死んだと思った少女が氷のような冷たい目をして、こちらを眺めていた。
やっぱり、恨まれていたのか。
まちがいない。
さっきの思考は正しかった訳か。
「当然の報いを受けるがいい・・・。」
低くかすれた声が聞こえてきたと思うと、

ひゅっ。
何かがかすめた音がした。
「えっ・・・・・。」
一瞬、何が起きたかは分からなかった。
だが、
「うわあああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああ。」
私は、自分の体を見て悲鳴を上げた。
なんと、さらに伸びてきた蔓が右手をばっさり切り落していたのである。
切られた右手はというと、路地にごろりっと転がっていた。
切られた肉の断面から絶え間なく血があふれている。
私は、切られた痛む体をかばうとするが、もうかたほうの手が蔓で巻きつけられているのでどうすることもできない。
攻撃はそれだけでは、なかった。
「ひぎゃ・・・・・。」
次々に、もう片方の手と足・・・襲撃はやまなかった。
「がっ・・・は。」
口からは、血が、目からは涙がたえず溢れ出す。
私はどうすることもできず、なすがまま。
「ごめんなさい。ご・・めんなさい。許して。」
私は、必死に許しを途切れ途切れに紡ぐが、結崎さんには届かなかったみたいで、
「さようなら。」
その声が合図となって、蔓が、自分の首を切断した時、そこで私の意識は闇へと消えた。
＊＊＊＊＊
その後も、日本各地で、怪奇現象が起きた。
夜中に突然、何かにつきまとわれているような気がしたり、夢の中で死んだはずの少女が現れて、追いかけられたとか。
怪奇現象に会うのは、かならず人生の中で、彼女と何らかの関わりがあった者達だった。あるものは、嘆き、あるものは、トラウマになり、後遺症を心の中に幾つか残した。そう、彼女の心に降り積もった灰の量だけ。

あー楽しい。
夢みたい。
かつて、私を苦しめたやつらが、喚き、嘆き、苦しむ姿を見るの。
こんな日がくるなんて、夢にも思わなかった。
これじゃあ、足りない。
もっと、もっと、与えなきゃ。
私は、もっと、苦しんだ。
だがら、いいよ・・・ね？

「いや、よくない。非常によくない。憎しみとはこうも人をかえてしまうのか・・。お前は更生するのに時間がかかりそうだ。」
声が突然、聞こえてきたとおもったら、次の瞬間、世界が真っ暗になった。
＊＊＊＊＊＊

3．見習いのその後の話

チュン
チュン

ん？
鳥の声がする。
地獄にしては、平和だなあ。
もっと、静かで恐ろしいところだと、思っていた。
眼を開けると、恐ろしい般若の格好した、いかつい巨人とか、全身、黒いフードですっぽり包まれ、でこぼこしたお面を顔につけて、魂をかるために金ぴかにみがかれた鎌をもっている外見の人とか、いるんだろうなあ。

そう考えると、なんだが、眼を開けたくない。
このまま、眼をつむろうか。
「邪魔なんですけど、そこで寝られたら。」
げしっ。
痛てて、なにかに踏まれた。
「それとも死んでるの？いやだねえ、死体ふんずけるの。縁起悪ぅ。」
そりゃあ、さっき、死にましたけど。
だって、ビルの上からまっさかさまに飛び降りたら普通の人間は、死ぬでしょう。
「・・・・っ。ちょっと、いいかげん起きたらどう？いつまで、寝てるのよ。」
げしっ。
もう一回、踏まれた。
さっき、縁起悪いとか、死体とか言ってませんでしたか？
それでも、私は狸寝入りを続けた。
心の奥で、どこかに早く行ってほしいと思いながら。
「こうなったら、・・・・●★☆。」
声の主が、なにか、ぶつぶつと言っている。
次の瞬間、驚くことになる。
？？？？？
突然、浮遊感がした。
何、この状況は、浮いてるのですか？
私は、心の状況では、パニックになっていた。
「悪いけど、入学説明会に遅刻するわけにはいかないの。だから、このまま、連れていくからね。」
そう言って、声の主は走り出した。

そのまま、私の体も引っ張られていく。
待って、今の私は、とんでもない状態では・・・。
途中で、ドアが閉まる音がした。
「待ってください。私達も入学者候補ですからあああ。」
今、私達って言ったか？この人。
入学って、地獄にも学校があるのか？？？
いいかげん、目を開けたほうがいいのかな？
「ふむ。この二人で最後か。ん？なんだ、この女は。」
「はい、門の前で生き倒れになってたんで、連れてきました。たぶん、あまりの緊張に前日からご飯を食べていなかったのでしょう。」
なんか、失礼な人だな。
「なるほど、通ってよろしい。」
ぱち。
「あっ。やっと、目が覚めたな。お前。」
目の前には、私が縁をきったはずの人間がそこに。
脳裏に今までのいやな光景が蘇る。
おぞましい、記憶の数々が。
「・・・・・っ。」
嫌だ。
人間なんか。嫌い。
地獄に来てまで見たくなかった。
「お前達、さっさと行くのだ。もう、ベルが鳴っているぞ。」
門の門番は、人間じゃなかった。
そこにいたのは、虎だ。
ぐるるる。
こっちを見てうなっている。
「ほら、あんたも、入学候補者でしょう？行くよ。」
そう言って、目の前の人間が私を握ってきた。
その瞬間。
私は、弾かれたように手を振り払う。

「・・・・・。」
私は、冷たい目で目の前の人間を見ていた。
「・・・・・。えーと、遅刻するんですけど？もしかして、おなかすいてるの？」
はいっと言って、目の前の人間はジャムパンを渡してきた。
まさか、さっきの言葉を本気でとらえていたのか？
「・・・・・。」
なんだか、怒る気が失せてきた。
私は、渡されたジャムパンを持ったまま、ぼうぜんとしていた。
「こらああ、お前ら、さっさと行けといってるだろうが。のんびり、するんじゃない。」
がるるる。
門番は、今にも、飛びかかりそうなオーラをかもしだしていた。
もしかしたら、その牙で食われるのかも・・。
「ほら、なんか食われたくないし、ここは、行ったほうがいいよ。」
その言葉にうなずく。
私達は、とりあえず門を離れることにした。
言っておくが、この横にいる人間を許しているわけでもない。できれば、関わりたくないし。
でも、ジャムパンはおいしかったらから、しかたなく一緒に歩いているだけ。
この世界について聞きたい事があったし。
さっきの虎といい、浮遊体験といい訳のわからない世界なのは確実であろう。

「着いたみたい。ここが、会場だ。」
どうやら、着いたようだった。
「・・・・・。」
これは・・・。
私の目の前には、ヨーロッパにありそうな、それは立派な聖堂が

建っていたわけではなく、小さなオンボロの小屋がぽつんと、建っていた。
「なんか、想像してたのと、違うのですけど・・・。いまいちなセンス。これが、・・・・・の校舎？？？」
これは、ないだろうと、顔をしかめる横にいる人間。
「まあ、見かけかもしれないし。とりあえず、あの小屋に行くか。」
人間は、すたすたと小屋に近づいた。
「ほら、あんたも来るの。」
私が、小屋に見入っていたら、手招きされた。
私は、好きだけどなあ。
この小屋。
なんか、のほほんとしていて・・・。
しかたなく、人間に付いていく。
「じゃあ、開けるからね。」
かちゃっ。
これが、私の始まりの物語。
＊＊＊＊＊＊

「と、言う訳。」
ちょうど、私は、ある人間の前で自分の過去の話をしていた。
「なるほど、ドアを開けると、真の魔法学校があり、訳のわからないまま、通うはめになったと・・。迷惑な話だな。」
こいつは、私と同じくこの世界にきた人間。
でも、違うのは、死んでいないし、無理やりつれてこられた事。
なぜって？
虹のダイヤをなぜか持っていたから、他の見習い魔法使いが狙われ、むりやり、こっちの世界に連れてこられたのだ。
私は、前の世界で死ぬ間際にした非道な仕打ちのおとがめで、この世界をさまよっていたこいつの教育兼監視係にされ、今に至る。
もちろん、私は人間が嫌い。

私が嫌いだった前の世界から来た人間であるから余計に。
だが、これは任務。割り切るしかない。
極力、半径一メートル以内に近づかないようにしつつ、こうして話している。
「・・・・そういう事。迷惑な話だった。でも、魔法は嫌いじゃないから。べつに迷惑じゃない。」
現に楽しいと、思う。
「ふーん。で、お前の人間嫌いな理由もそういうことか。」
私は頷く。
「・・・・・私は、あれくらいの仕打ちで許したわけではない。現に、人間どもに復讐したお咎めであんたのお守り役。なんで、この私が人助けなんて・・。」
むしろ、殺したいほど憎いのに。
人間なんて、魔法ですぐ殺せるはずだ。
「あのよ。もしかしてなんだが、本当はそこまで人間が嫌いじゃなくなったんじゃねえのか？現に、俺のことだって、学校からの言いつけだけで、適当ほうりだしといたらいいのに、他の生徒から守ってくれるわ。寝る場所も食事も与えてくれるしよ。それに、憎き相手になんで自分の過去を話してるんだ？」
どうしてなんだろう。わからない。
こいつの世話をやいてしまうのも、自分の過去を話しているのも、私は、結局・・・。
「・・・結局、お人よしって？あいにく、私には慈悲深い心はないの。あなたをそこらへんにほおっておくと、虹のダイヤを簡単に奪われそうだし、私の評価も下がる。つまり、メリットがあるだけ。」
そう、メリットがあるから。
お人よしだと、簡単につけこまれてしまう。
それを私は何回も繰り返し、知っている。
「メリットか・・・。ずいぶんまた・・。」
はあっと、彼は息をはく。

実際にはため息なのかもしれない。
どうせ、こいつも腹の底では笑っているのだ。
信じてはいけない。
「でも・・・、もしかしたら・・・。」
もしかしたら・・・いや、そんな訳がない。
「ん？なんだ？」
あってはならない感情。
優しさとかそんなもの、とっくの昔に捨てたのだ。
「・・・・なんでも、ない。」
誰かに分かってほしかっただけなんて。
本当は、心の奥底に人間らしい感情が私にもあったのかもしれないなんて、認めたくない。
だから、言わない。
言う必要なんてない。
「・・・なんでも、いいけどよ。前半と中編は過激すぎだろが。いくらなんでも、引くぞ。」
いいかげんな突っ込みはいれてほしくない。
それに、ぎゃーぎゃーうるさい。
人がせっかく話してやったのに、なんて奴。
さっきのは、前回撤回。
別に分かっていらない。
やっぱり、人間は嫌い。
「・・・・どう思われようが、知らない。私は話した。ただそれだけの事。」
私は、再び、机に置いてあるに視点を向けると、椅子に座り、本に集中した。

（再び、俺視点に戻ります。）
あいつの過去を知った日から数日後。

俺は、あいつと一緒に授業を受けるべく、学園の校舎に来ていた。
本来なら、俺は必要なものではないのだが、「何かあったって、私は知らないから。自分の身は自分で守れるように魔法は自分で習ったら？」と言われてしまった。
いやいや、お前は俺の監視兼教育係だろうが、一応、教育も入っているんじゃねえのかよ。
ただ、あいつが過去を話した日から授業がない日は俺の魔法の練習に付き合うようになった。
いったい、何を心変わりされたんだんだが、あいつはあいかわらず、よくわかんねえ。
だが、この世界にいる限り、このよくわかんない女と付き合っていくしか生きるすべがなかった。

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7418i/

見習い魔法使いと退屈びより

2010年10月8日15時06分発行